
銀の魔法使い。

銀風 鈴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の魔法使い。

【NZコード】

N3102D

【作者名】

銀風 鈴香

【あらすじ】

超めんどくさがりな銀色の髪の主人公（女）が繰り広げる学園（？）ファンタジー！最強な女の子やヘタレの男の子、さらにはお爺さんなんかも出てきて・・・！？常識人（？）なのが狐だけってどうなんだ！？

プロローグ（前書き）

いじは本当にプロローグなので飛ばしてくださってかまいません。

プロローグ

ここは、ある町の商店街。

いつもは、とてもうるさい場所だか今は、静まり返っている。
なぜなら、今は夜中。こんな時間に外に出る人間なんて、普通はい
るはずなかつた。

季節は冬。

しんしんと降り積もる雪。

目立つ色にぬられていたお店の屋根も、普通の家の屋根も、みんな
真っ白になつっていく。

そんなところに、彼女はいた。

ボロボロのコートに、ブーツ、彼女の手には、とても大きい、手袋。

全部、「銀」色だ。

よく見ると、彼女の髪の色も、「銀」色。

瞳の色は、右目が青色で、左目が、緑色だ。

色違ひの目は、昔から、災厄の原因として、しげた虜^{さし}げられてきた。

その者が、老人であるうと、若者であるうと、子供であるうと、同じこと。

この少女も、妨げられてきた物の一人だつた。

だけれども、彼女は、そんなことは無かつたかのよつに、あぢけない顔をしている。

よく見ると、彼女といつより、少女といつたほつが合つてゐる年齢だ。

「今年も……」の季節が来たね……。」

嬉しい様な、悲しい様な声。

少女は、雪の降る、この季節が好きだった。

「人の心も……」の雪のよつと、真つ白のよつになればいいのにな……。」

これは、この少女がこの季節になるとこつも思つていふことだつた。

彼女が、今まで、一番強く願つてきただこと。
けれど、絶対に叶わない夢。

ほう、と白い息を吐く少女。

これから、この少女はどうなことをしてゆくのか。

それは、誰にも分からぬ。

この少女にも。

「銀」世界の中、少女は歩き出した

。

プロローグ（後書き）

ども。銀風です。

魔法ものが書いてみたいなあ～、って思つて書いてみた作品です。
未熟ですが、暇な方、読んでみてくださいっ！

第1話 風邪・・・？

「ふい、ふい、ふいくしゅん！！」

大きなくしゃみをしてるのは、中庭のベンチに座っている少女。

この少女の名前は、ニヤルガ。

ニヤルガ・ミュウ・ラビネス。

今年で13歳。

見た目には、8~9歳くらいにしか見えなくて、ニヤルガの悩みのひとつだ。

髪の色は、「銀」色。自分の体の中で、唯一気に入っている場所といつてもよかつた。

瞳は、青と緑の色違い。半分しか開いていないけど。。。

ニヤルガの今いる場所は、レイニール学園という魔法学校。

こここの学園長は、トム・アルベルト。年齢不詳。昔、ものすごく強いドライモンを封印したとかしてないとか。

この学園は、小等部から中等部、高等部まであって、一学年あがるには、毎回試験を受けなければならない。

そのため、何年も留学する生徒もいるわけで。

だから、クラスの年齢差がかなりあって、ひどい時には、老人と若者が一緒に授業、なんていうときもある。

この学園は、かなり人氣があつて、入るのは、かなり困難だ。

人氣のある一番の理由は、やはりこの学園が、有名な魔法使いを育ててきてる、といつものだらつ。

「はうううううううう。誰かウワサでもしてんのかなあ・・・・・。」

鼻をすすりながら、桜の花びらが振つてくる空を見上げた。

「もうこの学校に入学してから、3年、か・・・・・。」

ニヤルガは、春を教えてくれる桜の木を見て、そうつぶやいた。

『ちょっとニヤルガ』。今日、進学してから、初めての授業ですよう。早く行かないと、新学期早々、遅刻しちゃいますよっ！

高い、女の子の声がした。

ニヤルガの頭の中で。

『ああ～。そうだった～。ありがとー、ミロ。』

その声に、頭の中で言葉を返す。

コレは、テレパシーという、魔法の一種。

『急いでくださいよう！遅れちゃいますよう！』

ニヤルガの足元で、慌てているのは、真っ白なきしわ狐。

この狐が、ミロ。

ニヤルガとテレパシーで会話していた狐。

だが、もちろん、ただの狐ではない。

『ハイハイ。・・・・・まつたく、几帳面な妖精だな・・・・・はあ。

後半はかなり小さな声で言ったのだが、テレパシーなので、ミロに聞こえた。

『ちょっと！なに言ってんですか！？ニヤルガが私を呼び出したんでしよう！？』

ミロは、妖精なのだ。狐の姿は、妖精の姿でいると田立つから、といふことで変身している。

妖精は、魔法を使えて、しゃべれたりする種類もいるので、使い魔として人気が高い。

そんな妖精は普段、妖精界にいて、魔法使いに呼び出されると、そこから出てくるのだ。

つまり、ニヤルガがミロの主人なのだが、正直言つて、2人は対等の立場といつてもおかしくない。

『分かつてゐるつて……。ありや？ 教室つてどこだつけ？』
ベンチから立ち上がり、読んでいた本を、腰につけているウエストポーチにしまう。

『中等部の3・1！ ……まったく、自分のクラスくらい覚えておいてよ……。』

見ての通り、ニヤルガはかなりめんどくさがりのうえ、物事をすぐ忘れる。

だから、ミロはかなり大変な思いをしてきた。

『あはは～。ごめんごめん。クラス発表の時、寝てた。』

『あつさりいうな～！ ……つて、ニヤルガそのまんまの格好で教室に行く気？』

ニヤルガの今の格好は黒いローブに長ズボン、ブーツ、手袋。そして白いウエストポーチ。

『え？ 特に問題ないとと思うけど……』

『そこじやなくて、髪の色とか……。』

ミロに言われて、「ああ」という顔になる。

髪の毛は銀色、そして色違ひの目。はつきりいつと、

超目立つ。

『はあ・・・。この髪の色、好きなのに……。』

ブツブツ文句を言いながらも、ウエストポーチの中から、銀色の指輪を取り出す。

真ん中に、赤い石が入つていて、すごい高そう。

この指輪は魔具。

魔具というのは、魔法がかかっているものや、魔法使いが作ったも

の、そして魔法使いが使うもののことだ。

『まあ、そー ゆー事言わないで。』

ハア、と溜息ためいきをつきながら、指輪を右手の中指にはめる。

その瞬間。

ニヤルガの体が光り輝いた。

「銀」色の髪の毛が根元から黒色に変わり、後ろで、ちよこっとしか結べてなかつた髪の毛が腰の辺りまで伸びていく。色違いろちがいの目が、深紅に変わつてく。

そして、ニヤルガの13歳の体が、17・18歳あたりの体格になつていく。

『ふう。このロープ、体に合つ大きさになるようにつくつといて良かつた～』

その声は、さつきまでのニヤルガの声ではなく、もつと、威厳のある、低めの声だった。

ニヤルガのしゃべり方で舌撫したなでしだが。

ニヤルガの身に付けているロープも指輪と同じく魔具。

『うん。やっぱり、元の姿のほうが好きだけど、やっぱお母さんの姿もいいねえ。』

あの魔具の指輪はニヤルガのお母さんの物。

あの指輪をつけると、お母さんの姿になれるのだ。

(しかも、いつの歳にでもなれるから変装にもつてこいなんだよね)。

つていうのがニヤルガの言い分。

『はあ～。今年から、変装やめたりいいのに。別に、飛び級がいけないわけじゃないんでしょ？』

ニヤルガは飛び級して、中等部に入っているのだ。

普通、ニヤルガの歳だったら、小等部の3年くらいだ。小等部は、7学年まであるから、6年ほど飛び級したことになる。だから、クラスの人達と、かなりの年齢差がある。

『だつて、目立つのヤダしい』

（いや、もうすでに目立ってるんだよ？ニヤルガつて、にぶいなあ・・・）

ミロの思つてることは正しい。

ニヤルガは、大抵の授業は、ボーッとしてるし、本人は気づいていないかもしれないが、休み時間の時は全身から、「近づいて来るなオーラ」が出てる。

したがつて、友達は一人もいない。

友達がないのはいいとしても、授業中がやばい。

先生に、授業であたられる、教科書を丸暗記してるから、百発百中だし、実戦の魔法の授業でも軽々とやってのける。

裏で密かに「黒のロボット」なんて呼ばれてたりする。

なんで黒なのかといふと、ニヤルガがこの姿の時、着ている服は100%といつていいくほど黒色だからだ。

（まあ、本人が気づいてないならいいんだけどね・・・。）

『さて！ミロ、案内してよ。』

ニコッヒ、ニヤルガは笑つた。

『ハイハイ。こっちですよ。』

まったく、ニヤルガといふと、気苦労するよ・・・。

・・・。

そして、ニヤルガの、新しい学校生活が始まったのだ。

第1話 風邪・・・？（後書き）

ども。銀風です。

2話書けてよかつたです。

あと、読んでくれてる人、ありがとうございます！

未熟だと思いますが、よろしくお願ひします！

誤字脱字あつたら、教えてくださるとありがたいです。

第2話 クラスマート・・・？

『ひやつほーー！
パリーーン！

女の人の声と同時に、窓が割れた。

つてー窓から人来たー?』二階じゃなかつたっけ!?

ここは、中等部の廊下。

ニヤルガとミロは、3・1の教室に行くためにここを通りっていたのだ。

女のは、目の前にいるニヤルガを無視して、
「ふう。着地成功！」
なんて言つてる。

『どうしよう・・・。田の前に立たれたら、さすがに無視できないよ・・・。』

女のが入ってきた窓は、ニヤルガのちょっと前の窓。

『無視できない、というよりは、ガラスの破片で、通れませんね・・・。』

『』

ミロはニヤルガにそういった。

『ほら！あんた、重いのよ！さっさと起きろーー！』

女のは抱えていたものに話しかけている。

『ねえ・・・。ニヤルガ・・・。あの、女の人の持つてるアレって・

・・まさか・・・?』

『うん・・・。アレは人だね。完全に。』

女的人は軽々と、17・18歳あたりの男の人を抱えていた。
女の人も、よく見ると、17・18歳くらいだ。

『ひよ、ひよええええ！－！－じゃあ、あの入つて何なんですか！？
殺人鬼！？』

その言葉にニヤルガは首を横に振った。

『いや、まだ生きてるみたいだよ。死にかけてるけど。』

確かに、男の人は、白目をむいているが、生きているようだ。
「ん？あれ、人いたの？」ゴメンね。あとちょっとでぶつかること
ろだつたみたいだね。』

女的人は、ニヤルガに気づくと、謝った。

なんか、適當な人だなあ。

なんて思ひミロ。

『ニヤルガ？ぶつかってたら死んでたと思うんだけど・・・。あん
な謝り方でいいの？』

『え？別にいいよ。今生きてれば。』

ニヤルガも適當な人だからいいのかあ・・。
以外に気が合うのかな・・・。とか思つ、ミロ。

「あ。そー言えば、自己紹介すんの忘れてたわ。私は、ミロ。ミロ・
フォスター。よろしく！で、こっちのだらしない奴は、ユウキ。あれ、
苗字忘れたわ・・・。一応東洋人よ。」

普通に自己紹介し始めたよ、この人……。

「私は、ニヤルガ・ミュウ・ラビネス。よろしく。」

「つて、ニヤルガも普通に自己紹介しちゃってるし・・・。」

まともなのって、わたしだけなのかなあ・・・。とか思つマリロ。

「そり。ところで、3・1の教室つて、どこか知らない?私達、今日からそこで勉強とかすることになつてるんだけど・・・。」

「この人達、クラスメートかよつ!」

『・・・。この先、大変そうですね・・・。ニヤルガ・・・。』

「3・1つて、私も確かそこで勉強することになつてたような・・・。」

「。

『つて、そつからですか!…さつき3・1ですつて私言いましたよ

つ!…もう忘れたんですか!…』

『ありや?…そだつけ?』

「ここまで、物忘れ激しいと、脳みそがちゃんとほこっているのかさえ怪しくなってきたなあ・・・ニヤルガ。

「え? ニヤルガも3・1? もつと年上かと思つたよ。同じ年かあう。大人びてるね~。」

急にだらけた口調になつた//コ。

『これ、もし//うちが年下だつてばれたら、どうなるんでしょうかねえ・・・。』

『・・・。それは・・・ちょっと怖いかも・・・。』

「ん・・・んあ・・・//」「・・・ビ//?」

//コ抱えられた男・・・コウキだつたけ?が起きた。

「あ。コウキ。起きたの? だつたら自分で立て。」

ミヲはパツと手を離す。

「どはあ!?

まだ完全に立ち上がりていなかつたため顔から落ちる。

『痛やお~。』

おもわず顔に手をやる//コ。

「いつてえ~。いきなり手離すなよつー//ツッ。」

顔を抑えてコウキ。

「氣絶してゐるアンタが悪い。」

「なつ! 氣絶させたのミヲだろ!?

その後二人の争いが続く。

「えっと。話の途中悪いのですが……。」
なんなく敬語のニヤルガ。

「「何（よ）（だよ）ー？」」

『おお・・・。見事なハモリ・・・。』

感嘆する//ロ。

「あと一分で授業始まると思つたですけど・・・？」

「「『ああ～～！～忘れてたあ～』」」

って//ロ、あんたもですかい。

「もたもたしてられないわつ！～行くわよ！ニヤルガ、ユウキ！～」

ガシツ！ガシツ！

「「はい？」」

//に首元をつかまれた。

も、もしかして・・・？

「じつやあ～～！～」

「//ハせそのまま走り出した。

「や、やはりかあ～～～！」

『一ヤルガ・・・。幸運を祈ります！――』
敬礼するのロ。つい！

『なつ！？は、薄情者～～～！――』

一ヤルガの声は、//ロの頭の中でむなしく響いた・・・。

第2話 クラスマート・・・？（後書き）

ども。銀風です。

遅くなつてすいません・・・。

次は早く書けるようにがんばります・・・。

あと、感想とか、直したほうが多いこととかあつたら、教えてくれださるとありがたいです・・・。

第3話　トーナメント・・・？

「よつしゃーギリギリセーフッ！…」

3・1の教室の前でガツツポーズをしているのは、もちろんミラ。

「よかつたわね！コウキ、ニヤルガ！」

「コニコにしてミラが振り返るとコウキが

「良くなえよ！…イキナリ走るなつ！…」

と言った。

「何よつ！間に合つたんだからいーの！」

「あの・・・窓ガラスはアレで良かつたの？」

ニヤルガがそう聞くとミラはちょっとあせつたよつになつて

「え？・・・い、いいのよ別につ！減るもんじゃなし！」

といった。

いや、アレはおもいつきつ減るものだよ・・・？

「・・・。じょうがないんだよなあ・・・ミラの性格は直しじょうが無いから・・・」

ボソリと呟いたコウキだったが、ミラには聞こえなかつたらしい。その言い方から、きっと昔からトラブルやら何やらに巻き込まれてきたのだろう。

「1J、ご愁傷様です・・・。」

「ニヤルガ、何ブツブツ言つてんの？さつと教室に入るつー...」
「ミラに言われて教室の入り口に立つていたことに気がつく。

「うりやあとから入つてくる人に迷惑だな。だけよう。ユウキと一緒に教室の中に入る。

「おお～。なんか2年の教室と全然違うな～。」

確かにそうかもしねない。

ニヤルガが去年いた2・4のクラスは1人1つ机があつて、小学校のような感じだったが、3年は横に長い机が何個か置いてあつて、そして奥にいくにつれて高くなつていて背が低くても大丈夫そうだ。

「なんてゆうか、大学みたいですねえ・・・。」

つていうかなんで1年上がるだけでこんなに内装が変わるんだ？

「ほら～。ボサツとしない！」

ミラに引っ張られて真ん中あたりの席に座る。

ゴーンゴーンゴーン。

「あ。鐘なつた～。」

・・・いつも思うけど、何故寺のような鐘なんだ？

この学校見た目からして完全に洋風なのに・・・。

合わなさ過ぎる。

ガラガラガラッ！

大きな音を立てて、3・1の教室のドアが開いた。

つて言つうか、この教室に横開きの扉もおかしいような・・・？
洋風な外見のこのレイニーール学園。中身（教室）も、もちろん洋風で、横開きのドアよりも、普通のドアのほうがあつてゐる感じだ。

「ウイーッス。俺はこの3・1の担任になつたクリス・クレアント

だ～。よひ。」

入ってきた人物は男の人。
見た感じ20代だろうか?
金髪に青い目。イケメン・・・なのだろうか?

つて言うか馴れ馴れしすぎるつー!?

教師の癖に思いつきりタメ口ですかつ!?
しかも「よひ」つて略してるしつー!?初の顔合わせなんだからちやんと言おうよつー!?

「さて、イキナリだが、このクラスでやつていくためにパーティを決めようと思つ。」

マジでいきなりですねつー!?

ちなみに「パーティ」つて言つのは、クラスとかで一緒に課題とかをこなしていく仲間みたいな感じかな?ただ1人が補習とかになるとパーティ全員連帯責任になっちゃうから、簡単に決めちゃうと後がキツくなつてしまつ。

つてことで結構重要なことなんだよねー。1年間変更きかないし。

「それで、簡単に決めちゃうとつまんねえから、面白いやり方で決めたいと思う。つて言つが決める。」

命令口調ですかつ!?

「面白い決め方つてどんなんですか先生?」
まじめそうな生徒さんが手を上げて質問。

「そだな・・・じゃ、バトルロワイアルで。」

イキナリ何言つちゃつてんですか先生！？

教師なのに殺し合いとかしたらヤバイですよつ！？

「冗談だよ。本氣にするな。」

いや余つたばかりでなんですが、まったく「冗談に聞こえませんよ？」

「バランスのとれたパーティーにするために、死なない程度に試合がなんかしてもらひつ。」

死なない程度つて・・・。教師の言葉ですかつ！？

「魔法使つても、体術使つてもかまわんぞ〜」

なんでもアリですか？一応中等部だからかなり怪我する人とか出でぐると思つますよ？

「安心しろ。ちゃんと学園長に許可つてあるから。」

つて学園長つ！？

あんた何やつてんですか！？

ニヤルガはこの学園の未来が心配になつてきた。ついでに言つて自分の命も。

「はあ・・・。俺やつぱり運超悪いわ・・・。」

隣を見るとコウキが頭を抱えている。

「「、「」愁傷様です・・・。」

というわけで、3・1のクラスで「トーナメント戦」が行われることになった。

新学期早々こんなでいいのかつ！？

第3話 チーナメント・・・？（後書き）

作者（以下作）：「…」も。銀風です。

ニヤルガ（以下ニヤ）：「…」ホー、ニヤルガでーす。

作：そー言えばだけどニヤルガ？

ニヤ：ん？何？

作：何で小学校とか大学とかの教室知ってるの？

ニヤ：え…。そ、それはい、異世界の友達がつ！

作：え！異世界に友達いるの？…す「」つ！

ニヤ：そ、そりゃよ。まあそこら辺は別にいいとして…

作：え？もうちょっと聞きたいんだけど…

ニヤ：こつ、これからもこの小説をよろしくお願ひしますつ！

作：え、ちよつと！

ニヤ：質問とかじやんじやん送つてくださいつ！直したほうがいい
よつなこととかも教えてくださるとありがたいですつ！

作：え。ちよつと何まとめようといつ！？

ニヤ：でわ次の話でお会いしましょー！

作：ええーつ！？終わっちゃたのーつ！？

第4話 黒魔法・・・?

「次ミラの試合だよね~?」「ん~確かそーだな・・・。」

ニヤルガとコウキは今レイニール学園の体育館にいる。かなりの大きさで、東京ドームの半分くらいある。本当に無駄に広い。

「//リつて何属性なの?」

属性とは、精霊魔法に関することで、精霊魔法というのは、普通の魔法は自分の魔力で魔法を使うのを精霊魔法は、精霊に魔力を貸してもらつて行なう魔法のこと。

そしてその精霊には属性があつて、火、水、地、風、闇、光、無の7種類。

そして属性^{じゆ}ごとに性格が異なつていて、その精霊に好かれないとその属性の精霊魔法は使えない。

「ミラは火属性だよ。まさに性格ぴったりだからね・・・。」

火属性の精霊は気性が荒いことでも有名だ。

「あはは・・・。確かにね・・・。」

そんなこんなで、体育館にミラが入ってきた。

「コウキッ!!」

「んあ? 何だ・・・ってどはあ! ?」

ミラが完璧なフォームで投げた鞆^{かばん}がコウキの顔面に命中。

ガツツポーズするミラ。

「それが元真ん中ー・・・・・ってふれかんじやねえ――・・・・・」

完璧な乗り突っ込み

「いや、なんかあんたが私の悪口言つてゐよいつな気がして。

「えええッ！？何で知つてんのっ！？エスパーッ！？」

「それよりも、それもってなさいよつ

人差し指をユ白

なにもそんなことで鞆投になぐてもいいのに……とか懇々たる

•
•
•
•
•

27

「えと・・・。ミラの対戦相手はキラ・グレイズ？誰だろ・・・。
「えええ！？ちょっと！一ヤルガお前キラ知らねえのかよっ！？」

ポカンとするニヤルガ。

「キラつていつたら、実技魔法の成績トップだぞっ！？何で知らねえんだよ！？」

「実技魔法」
・
・
・
?
・
・
・
・
・
・
あ
あ
！
—

ポンツと手を打つ。

「実技魔法は立つたまま寝てたからほとんど覚えてない。」

ええええええ！！？？

「い、今まで一度も寝てなかつた」と無二のかつ！？「うん。少なくとも、一年生の間わ。^{あいだ}」

筋金入りの無神経 · · · ?

•
•
•
•
•

「それでは、ミラ・フォスターVSキラ・グレイズ！始め！！」

ビ――ツ！

ホイッスルが鳴り響く

「セレ。始めよつか?」

•
•
•
•
•

— . . . o —

「アソツ成績はいいんだけど、ナルシストで……。」

なるほど・・・。人つて完璧につくられないものなんですねえ・・・。

まあ確かに顔はカツコイ一方だろう。

•
•
•
•
•

「キモイのよッ！－ふざけんなッ！」
真正面から言つちやつたよ・・・ミラ。

「なつ！？ひ、ひどい・・・。
早くも精神ダメージ！？
「つたく・・・。殺_やるわよ？」
殺しちやだめですよつ！？」

「燃え盛れ火の粉よ！「ファイヤボール」！－」

ミラが唱えたのは簡易魔法で、普通ならうつそくに火を灯すぐらいの威力の物なのだが・・・。

ゴオオオオ！！！

人一人くらい丸焼きにしてしまいそうなくらいの大きさの業火^{じゅうか}が現れた。

「なつ！？」
さすがにキラも驚いている。

「うふふ。死にたくなかつたら、ちゃんと防ぐことね？」

・・・・・・

「・・・すごいですね・・・。」

「いや。実はアレ、//の欠点なんだよな・・・。」「・・・？」

「//は、どんな魔法でも、黒魔法並みの攻撃力にしてしまうんだ。」

「・・・。」

ちなみに黒魔法って言つのは、攻撃専用の魔法の種類のことです

「それって・・・。回復魔法も・・・？」

回復魔法って言つのはもちろん治癒とか。おもに、水属性や光属性の分野

「・・・。ああ。よく実験台にされた・・・。」

過去の傷が痛むのか、お腹をおさえて真っ青な顔になつて言つた。

つてことは傷をもつと広げ・・・考えるのやめよ・・・。

「『』愁傷様です・・・。」

・・・・・

「いつけえ〜」

軽く手を振つて炎をキラに投げつけた。

「う、うわっ！？？？く、緩^{ゆる}やかに流れる水よ、攻撃を防ぎまたえ！－「ウォーターシールド」－」

そのまんまの名前で水の盾。

中級魔法でかなりの硬度^(度)誇る・・・はずなのだが。

バシャーン!!

ミラの火の玉があたり、水の盾が蒸発した。

・・・・・

「わあ。反則な威力じゃん。」

「・・・普通は火は水に弱いはずなんだけどな・・・?」

属性の法則で、火は水に弱い、水は風に弱い、風は地に弱い、地は火に弱くて、そして、光と闇はそれぞれ対極の位置にある。

ただそれはその属性同士の威力が同じだった場合の話。弱いほうでも、威力が高ければ強いほうを相殺できる。

「・・・『愁傷様です・・・キラさん・・・。』

ニヤルガがポツリとつぶやいた言葉は、虚しく中に消えてゆくのだった・・・。

そしてキラ・グレイズは1ヶ月入院することになりましたとさ

第4話 黒魔法・・・・？（後書き）

作：ジモ。銀風です。

ミハ（以下ミ）：ヤツホー・ミハよ！

作：ミラさん、どんな魔法でも黒魔法のようになってしまつて本当ですか？

ミ・え（汗）ま、まあそなのかしら？

作：じゃあ、治癒魔法しようと/orウキさんを殺しかけたつてゆうのも本当ですか！？

ミ・ひ・・・・。そ、それは・・・。ま、まあ失敗は成功の元つてことだつ！

作：本当に元になつてるんですかあ？

ミ・な、なつてるわよ！つて事で、これからもこの小説よろしくね！

作：・・・無理矢理だな・・・。

第5話 感電死・・・？

「いやあ～。なんかすつきりしたわ～」
爽快に笑っているのはもちろんミリ。

「相手弱すぎよねアレ。もっと手こたえのある奴いないのかしら？」
「この学校には初級の魔法で敵を丸焦げにできる人はいないと思われます・・・」

なぜか敬語のユウキ。

「ん～。でもアイツほど抵抗してこないんだよ？ユウキだつたらもうちょっと面白かったのに～」

「・・・。それは俺のリアクションが面白いから、という風に受け取つていいのか？」

「あつたりまえ」

軽く落ち込むユウキ。

・・・・・

「ふあ～～～。眠いなあ～～。」

大あくびをしているのはニヤルガ。

次はニヤルガの対戦なので体育館のど真ん中にいる。

「早く来ないかなあ・・・対戦相手。」

ニヤルガがこの場所に立つたのはつい一分前くらいなのだが、短気、
といつわけじやなく

「めんどくさいからやつと終わらせたいなあ～・・・。
とか思つてゐからであつた。

「お待たせしましたあ～～～！！」

バンッ！

体育館の扉を大きな音を立てて開けて現れたのは、女の子。

茶色い髪を二つ結びにして活発そうな短いローブを着ている。
それとは裏腹に、たれ気味の緑の目が印象的だ。

・・・・・

「あ。ニヤルガの対戦相手はあの子かあ。コウキ知ってる？」

「ああ、アイツは確かウィル・パマニーだよ。ってか去年同じクラスだつたろ？」

「え？・・・・ア、アハハハハ」

目線を逸らすミラ。

「・・・・はあ。ミラつていつも人の顔おぼえないよな・・・。」

「うぐつ。」

「こればっかりは言い返せないミラでした

・・・・・

「ウィル・パマニーVSニヤルガ・ミュウ・ラビネス！始めッ！」
ピ――――ッ！！

ホイップスルが体育館に鳴り響く。

「よろしく～。」

呑気に挨拶するニヤルガ。

「容赦しませんよっ！古より吹く風よ！わが意のままに舞え！」「ウ
インドカッター」！

ウイルの手のひらから見えない刃やいばが放たれる。

「んー。でい。」

気のない声でニヤルガは手を前に突き出す。
それだけで、刃が相殺された。

「なつ！？無音魔法つ！？」

無音魔法とは、魔法の使い方の種類で、
通常は詠唱魔法で普通に呪文を唱える方法。

次に短縮魔法。これは難易度が高くて、呪文の『鍵かぎ』となる部分を
唱える、という物だ。ただし、呪文を省略する代わりに威力が三分
の一になってしまふ。

そして最後に無音魔法。

これは短縮魔法より難しくて、何も唱えずに魔法を発動させるとい
うものだ。

もともと魔法というのは、イメージで発動させるものだから、呪文
は要らないのだが、それは理論上の話。本当にやるにはすごい精神
力がいるのだ。

実際にそれができるものは、この学校には1・2人くらいしかいな
いだろう。

「風の魔法かあー。えっと、苦手なのは、地だけ？うん・・・。
じゃあ、えいつ！」

ニヤルガは人差し指をウイルの立っている地面に向かた。

そのとたん、ウィルは、その場から動けなくなつた。

「なつ！？」の魔法は上級魔法のはずよつ！？」

ニヤルガの使つた魔法は、地の上級魔法の「マッシュハンド」について
もので、そのまんま訳して、泥の手。

ニヤルガの位置からは見えないが、おやぢらウイルは泥の手に足を
つかまれていてるのだ。

「えへと、相手が気絶または戦闘不能になつたら試合終了だつける
どーしようかなコレ。」「

・・・・・

「あーもうーーどうなつてんのか分かんないじやないつ！」

「うーん・・・・・。おそらく地系の魔法で足止めしてるんじゃない
か？」

「・・・・・なんで分かるのよ・・・・・。」「

なんかジト目でコウキを見てきたミリカ。

「（顔怖いって・・・・・）なんかウィル、地面に固定されてるみたい
いだ、と思つたからな。」

「地面に固定つて・・・・・。この体育館、石でできてんのよ？」「

そう。この体育館は石でできてる。それも、ここくんでしか取れ
ないダイヤモンド並みに硬い石で。

「だからこそだ。この石は特殊で、地の性質を持つてるんだぜ？前
授業でやつたと思うけど？」

「え。う、嘘そんなの全然・・・・ハツーい、いや知、知つてたわよ
つ！？」

・・・・・はあ、ミリカあの授業寝てたな・・・・・。

ちなみに地の性質とは・・・。

物にはすべて性質があつて、それは精霊の属性と同じく7種類。その物は、その物の属性に反応するようになつて、例えば火の性質の物を燃やしたりすると普通の何倍もの燃え上がり方をする、といった感じ。

だからニヤルガは地の属性魔法を石に向かつて簡単に使えた、とうわけ。

だけど普通は、石を泥に変えたりすると魔力の使いすぎで倒れるけど・・・。

・・・・・

「ねえ。ウイルさん。」

「何よつ？つてゆうか何捕まえてる相手に悠長に話しかけてんのよつ！」

・・・うわあ～この人苦手なタイプだあ・・・。

「棄権してもらえません？」

「はあ！？」

呆れた声を出すウイル。

「戦闘不能にするのは簡単ですけど・・・めんぢいし？」

あなたはやつぱりそれですか？

「あきらめないわよつ私は！パーティーって結構重要だし、何より・・・

「・

かつこじとじる見せるチャンスじゃないつ！

「・・・・・。（ハア・・・・。）の人見栄つ張りなのかな・・・？」
といあえず、あきらめる氣が無いことだけは分かつた。

「そういうことなら、手加減しないよ？」

スッと手を上げる。

「な、何する氣よー？」

「何つて・・・」

殺す氣？

「おおおおーーいー？殺すなよつーー？」

遠いところから、コウキのツツコミが聞こえた気がしないでもない
が、無視する。

「手加減しなかつたら殺すつて、どんな思考回路よつーー？」

今度は、田の前からのツツコミ。

「ええー。だつて生かして倒すつてキツイんだよ？」

知らねえよ！

「んじやーー・・・生き埋めは？」

どつちにしろ死ぬだろツー？」

とか、天の声が聞こえたような気がしたが、やつぱ無視。
「じゃ、窒息死。」

もう名前に「死」ついてるからー死んじゃつてるからつー？」

「ええー？他は焼死と溺死くらいしか知らないなあー」

結局殺す気なのつー？」

「あ。あと、感電死があつたなー」

や、やりかねんよこの人・・・。電氣とおつてないこの場所で感電
死くらいやりそุดよ・・・！」

「・・・棄権します・・・うう・・・。」

無表情、もしくは楽しそうな顔で自分の死に方にについて語られたら誰でも棄権するだらう。

「むう。途中で意志を曲げるのはよくないだ。」

やや残念そうな声でニヤルガがそういったのは嘗つまでも無い。

ちなみにウイルは精神科に1ヶ月ほど通うことになつたとさ

第5話 感電死・・・？（後書き）

作：ども。銀風です。

ユウキ（以下ユ）：俺はユウキだ。

作：フツ、コウキ君。君の事はいろいろ聞いてるよ？

ユ：どんな風に？

作：男の癖にミラに頭が上がらないとか・・・。

ユ：オイオイオイツ！？誰だよそんな事言つてたの？

作：・・・異世界の友達？

ユ：誰だよ！？そんな奴いんのかよ！

つてかそれニヤルガの言い訳じゃねえか！？

作：むう・・・。60点。

ユ：何がだよ！

作：ん～・・・ツツコツツ。

私から言わせてもらえばもう少し短く・・・

ユ：言わんでいいわ！

作：む・・・。次はもつといいツツコツツを頼むぞ。

唯一のツツコミ君。

ユ：あ・・・。ものすごく疲れそうな予感が・・・。

作：では、また次のお話で会いましょ～～

ユ：え！？終わり！？なんか俺作者にもいじられ・・・！？

第6話 しゃべる剣・・・?

「ふう〜。めんどくさかつたけど面白かったな〜」
「・・・。つ、次はユウキの戦いよつー！」

「そつか〜。ユウキの特技ってなに？」

「特技はね・・・。アイツらしからぬ感じで、『魔法剣術』なのよ。ま、私に勝てないくらい弱々《よわよわ》だけどねえ〜〜。」

『魔法剣術』とは・・・。

そのまんまで魔法と剣術が合わさったもの。
おもに剣に魔法をまとわせて使う。（炎をまとわせたり、電気をまとわせたりetc・・・。）

この『魔法剣術』用に開発された『魔剣』というのもあって、それぞれ違う属性を持つていて、水だつたり火だつたりする。
この『魔剣』を用いることによって、魔法を使えない人でも『魔法剣術』が使えるようになつた。（ちなみに『魔剣』を開発したのもこここの学園長のトム・アルベルトだ。）

そしてここコレイール学園では、魔剣（普通はこういう風に略す）の授業も行なつていて、魔法を使えなくとも、魔剣を持っている人なら学園に入学できることになつている。

「ユウキって魔法使えないの？」
「ん？一応使えるわよ。い・ち・お・う、だけどね。」「一応つて・・・。何か普通じゃないとこでも？」「そーゆつーアイツ、黒魔法は一切使えないのよつー？弱すぎつー！相手になんないわつーまったく、回復魔法とかしか使えなくて攻撃

は魔剣に頼りつゝでさつ…！」

「・・・。」

黒魔法しか使えないあなたに言われても・・・。

『まあ、いいondonjijinanzijyaini no?』

ニヤルガのこの声は、都合よべ//コノヒノ聞ひえなかつたよつだ。

・・・・・

「あ～～。勝てるかな～～。」

肩に抜き身の剣を持ち、独り言を語りコウキ。

『勝てるに決まつてんだろーが！まつたく、おまえはいつも弱氣だな。』

声がした。

コウキの頭の中で。

これは、ミロのテレパシーと同じもので、そしてコレを使ったのは

「うつ。手厳しいな、グレゴールは。」

『はつ。俺を作った奴に言えよ。魔剣は作った奴の性格が写されるんだからな。』

そう。テレパシーを使ったのはコウキの持つ剣。柄に“グレゴール”と彫られている。おそらく剣の名前だらつ。

『それにしても、魔剣つてしまふんだな～～。』

『ああ。よっぽどへたなやつが作らなければみんなしゃべるぞ。俺

の喋りが流暢なのは、作ったやつがものすいこいい腕だったからなんだぜ。』

『ふーん。そいやだけどグレゴールって誰が作ったんだ?』

『へつ。そりや～と言えねえぜ。作られたとき、そう約束させられたからな。破つたらまた鉄の塊に戻されちまうぜ。』

「・・・。(そんな恐ろしい人なのか・・・?)』

『おつと。相手のお出ましたぜ。』

グレゴールはそう言つた。

そして、体育館の入り口から入つてきたのは・・・。

「なつ!?

『「爺さんじやねえか!-!」』

・・・・・

「アレが対戦相手があ・・・。見たこと無い爺さんね。普通老人だつたら結構顔が知れてるはずなんだけど・・・。」

「飛び級とかしたんじゃないの?」

「」の学園は入学試験をいつ受けてもいいので、お爺さんが今年入学試験を受けて、飛び級してこの学年に入るかも知れないからだ。

「ヤルガは自分がそうだったため（？）、ミクにそう聞いてみた。
「はあ・・・。なに言つてんのニヤルガ？飛び級だったらもつと有名よ？なにせ、飛び級なんてここ百年ないんだから。というか、飛び級とかむかつくわよね。年下の癖に私達と同じくらいの実力なんて。まあ、年下じゃないときもあるけど、もし同じクラスになつたら・・・我慢できないかもね。」

黒い笑みを浮かべるミク。（鬼の形相とはまさにこの事）

「うわ～～。そつなんだ・・・。（ぱ、ぱれたら殺されるつ！？）

「『だけどね～～。やすがにコウキでもあんな爺さんには負けないわよ。杖ついてるし。』
確かに入り口から入つてきたお爺さんはふらふらしながら杖で前に歩いている。

「楽勝ね。うん。」「いや、そつはいかなさうだよ？」「・・・？」
「ヤルガは、面倒やうに笑つた。
「コウキはどう風に対応するのかな？」

・・・・・

「コウキ・フイステル／Sレイ・バスター。始め！」
ピ――――ツ！とホイッスルが鳴り響く。

『よつしゃ、いぐぜ相棒！』

「お、おう！」

ユウキは、銀色に輝くグレゴールを構えなおした。

「ふお、ふお、ふお。魔法剣術使いかの？なら、わしも魔法剣でお相手するとしよ。」

おじこさん・・・いや、レイはどうからか黒い刀を取り出した。柄も、鞘も、黒く輝いている。

柄には、“セルリック”と彫られていた。（ちなみにユウキの視力は1・9。本の読み過ぎで下がったんだとか。）

レイはセルリックを抜いた。

予想通り、刀身も黒く光っていた。

「爺さんも魔法剣使いか？」

「ふお、ふお、ふお。そのようなものじや。」

・・・いまどき「ふお、ふお、ふお」は古こよくな・・・。

「さて、いくかの。」

『相棒！行くぞ！』

キーン！！

一瞬で間合いをつめたレイが剣を振る。

「危なつ！…当たつたらどうするんだよ……！」

グレゴールで防ぎながら文句を言つ。

「まあ、当たつたら葬式ぐらいいはしてやるうかの？」

「殺す気かよつ！…あくまでパーティ決めだぞつ！？」

笑顔で言つてのけたレイに突っ込むユウキ。

・・・・・

「・・・結構やるわね？あの爺さん。」

「ゴウキの苗字ってフィステルって言つんだっ！！！知らなかつたよ
ツー？つていうか教えてもらつてなかつたよねーーー！」

「ヒヒンゴッ！？？」

・・・。

「（つはーーいけない、いけない・・・。私はボケなのに突つ込んでしまつたよ・・・。）」

「・・・まあ、なんかこの勝負決まつたようなもんだね。うん。」
腕組をして急に真面目に話し始めたニヤルガ。

「決まつたって？見たところ互角だけど・・・。」

「・・・まあ、見てたら分かるよ。」

・・・・・

「ぐつーおわつー？びひやあーーー！」

『攻撃受けるたびに変な声だしてんじやねえよーーーちつともいひち
からも攻めろーーー』

剣に怒られるゴウキ。・・・なんか、かわいそ。

「ふお、ふお。まだまだじやの、青年。」

超激しい動きをしてゐるのに余裕で、息ひとつ切らしていないレイ。

「ば、化け物かよアンタ……」

カーン！

「経験の差じゃよ。青年。」

ガキーン！

「俺は、青年じゃない、コウキだあ……」

キーン！

「ふむ。なかなかやつおるの。…………だが

「どわつ！」

くるくると、綺麗に回転し、地面に刺さるグレーポール。

『だあー！てめ、何手あ放してんだよー馬鹿わー』

剣にまで馬鹿といわれるコウキ。…………哀れ。

・・・・・

「ほひ、もう勝負決まつたじやん。」

「ひつわ、あんな爺さんにはけるなんて……あつの馬鹿コウキ。帰つてきたらぶつ飛ばしてやるー！」

早くも殺氣を撒き散らす!!
「まあまあとなだめるニヤルガ。

・・・・・年上に止められた・・・・・年上といじりつけよ~

「負けるのも当たり前だよ。だって、あのお爺さん……。」

「え？ あのお爺さんがどうかしたの？」

落ち着いたミラが不思議そつてニヤルガに聞く。

「あはは。次の人とあたるとこにな 楽しきつ 「

答えになつてない・・・。

「一、「怖いわよニヤルガ・・・?」

リリフをも怖がらせるニヤルガは、ある意味最強かもです

第6話 しゃべる剣・・・?
(後編)

作・ども、銀風です

レイ(以下レ)：始めましてじゃ、レイと言つ。

作…さて、早速ですが、お詫びします。遅れてすいませんでした！

阿爾法圖書出版社

レ：ふつ、休みの間ずつとゲ・・・

作…どわ――――！ 言うなあ――――！ 言うたら読者減るだろ――

卷之三

作：え、何それ！？自己責任って、自分の責任だけだよね！？

レ：このギャラを作った自分が悪い。

アーティストの言葉

レ・なぬ！？そ、それは勘弁していただきたい・・・

作：ヤハハハハ！じゃあ、読者の皆さん、次回お楽しみに〜

卷之三

第7話 変装・・・?

- 1 -

「…たく何なのよあいつらー！ふざけんじやないわよー。」

「ハニハニで兼權しやがつてえ……」

- 1 -

卷之三

「・・・・・はあ・・・・。」

す」と愚痴を言ひでしゆの上りもせん

愚痴を言つている理由は、ミラの次の対戦相手が棄権したから。誰でも前の対戦相手を丸焦げにした人とは戦いたくないだろう。

「...。アラカルト文庫」の紹介...」

一はん！何よ！老人に負けたくせにいっしーべーつだ！」

「何を！？ しあどき・あ・かんへー」 なんてしてる幼稚な奴に言わ
れたかねえよー！」

「なんだと！黒魔法しか使えないくせに！」

四三九

「この軟弱男！」
「この暴力女！」

この暴力女

バチバチバチツ！

・・・・・といつ効果音が出そうなくらいの勢いで『うむウムウム』
ラとコウキ。

「やるのー?」

「やんのかー?」

ミラは右手を上げ、コウキは背中にしょっているグレゴールに手を伸ばす。

止める人がいない^{ニヤルガ}の一人が、喧嘩を始めよつとしたそのとき[。]

『ちょっとやめてくださいよ。こんな所で喧嘩なんてされたら、ご主人の試合が見れないじゃないですかあ。』

恐ろしくて、誰も声をかけなかつたこの二人に、声をかけた人がいた。

いや、人じやなく『狐』がいた。

「「き、狐?」」

今まで喧嘩していたことも忘れ、啞然とする二人。

『はい。狐ですよ。』

あつたりと答えた、白い狐。

久しぶりの登場の、ミロでした。

・・・・・

「次の試合は、あのレイって言う人となんだよね～～」

「いつになく上機嫌なニヤルガ。

「あは。自分で言うのもなんだけど、ちょっとキャラ崩れてきた～。
・・・・・いや、最初から崩れてたのか？」

「はい。多分そうです。

「ふむ。次の相手はあんたかの？」

「いつの間にかニヤルガの正面に、レイが立っていた。・・・・・瞬間移動？

「うん。そだよ。よろしくお願ひねつ！」

動じることなく、嬉しそうに笑いながらニヤルガは言った。

・・・・・

「「悪靈退散――――ツ――！」」

『ええ！？イキナリつてひどいですよー？か弱い狐にツ！』

現在の状況は、

ミリカが畠をミロに放とひじして、

ユウキが剣を抜いてミロに切りかかるとしていて、

ミロが一人に文句を言つていて、

周りの人達がドン引きしながら見ないふりをして居たのといったところ。

「どーがか弱い狐だよ……！」

「どー見ても悪魔にしか見えないわッ！」

『ええ！？ひどいよ！？「狐＝悪魔」って狐と悪魔に対する最大の侮辱だよ！？』

何気に悪魔の心配までしあわせに口。

『ちよつと、話聞いてくださいよ。ユウキさん、ミリカさん。』

「へ？」
「な・・・・なんで私達の名前知ってるのよ！？」

・・・・・

「『ヤルガ・ミコウ・リベネス』レイ・バスター、始めッ！…」
ピ―――ッ！

こちらでは、戦闘（？）中のミロ達とは関係なく、『ヤルガ』との試合が始まっていた。

ちゃんと見られなくて残念でしたな、ミロさん。

「えっと、試合する前にやることあるよね？」

相変わらず、見た目に似合わないしゃべり方、しかも緊張感〇で対戦相手に話しかける『ヤルガ』。

「やること、わしにはまったく心当たりが無いが。」

こちらもまったく緊張感なしに話すレイ。

「何いつてんのさ。『お兄さん』？」

不敵に笑いながら、「レイに向かって」そう言った。

「…………ほう？ 何故そつづつ？」

先ほどの緊張感のまったくない雰囲気から一転、張り詰めた雰囲気。『ヤルガ』は、その中でも一切顔色を変えず話し続ける。

「『お兄さん』、変装するならもつと徹底的にやうなきや。……
・・私みたいに、ね。」

含み笑い、というヤツをする『ヤルガ』。
さつきからずつと笑っている。不気味だ。

「やつぱりか。なんとなくそんな気はしてたけどなあ……。でも

よく分かつたな？俺が、

『変装中』で、しかも『若い男』だつて。』

レイは、老人の姿からはまったく似合わない（ニヤルガ以上）若い男の声で話しかけ始めた。

「うん。けつこー完璧な変装だったよう？ただし、欠点が三つあつたんだあ。」

「ふーん。今後の参考のために聞いておこう。」

完全に、試合のこと忘れてる一人であった。

。

・・・・・

「「使い魔あ！？」」

『ハイ。かれこれ3年になりますかねえ・・・・。』

今の状況は、

何でミロがコウキたちの名前を知っていたのか、ミラが問い合わせて、ミロが少々昔話も混ぜながら（ミロだけ）楽しく説明を終えたところであった。

「つ、使い魔って上級魔術師にしか仕えないって言つヤツかー？？」

「この使い魔について説明しよう！」

使い魔といつのは本来『魔界』といつ所から、『魔物』を呼び出し自分に従わせる物である。

しかし最近では『妖精界』といつ所から、『妖精』を呼び出すこともできるようになり、

使い魔は『妖精』と『魔物』の一類類に分別されるようになった。

しかし『妖精』も『魔物』も、呼び出すのにもすこい魔力が必要でそれを従わせるのにもかなりの魔力がいる。

だから上級魔術師にしか使い魔は従わせられないといわれている。ちなみに上級魔術師といつのは、上級呪文を500以上覚えた魔法使いに『えられる称号だ。

『その使い魔です』

「え、ええええ！？？？じゃあニヤルガって上級魔術師だったのぉ！？」

『いえ、違いますよ？昔、「称号を『えようか？』って王様に言われたけどニヤルガが断つたんです。』

何気にすこいこといつたミロ。

「お、王様あ！？」

「ニヤルガってそんなんすこい人だつたんだッ！うわヤバイよ、思いつきりタメ口で話してたよッ！？」

今更な事言つてるミロ。もうどうしようもありません。

『確かにすごいかもですね～。私以外にもう一匹使い魔いるし。』

またまた衝撃発言。

二人は口をパクパク、酸欠の金魚のようになってしまいます。
驚きで声も出ないらしいです。

『あーー！もう試合始まつてるー？しまつたあーー。』
『氣づくの遅すぎなミロでした

・・・・・

「まず、一つ目～。」

「・・・。それよりもそのホワイトボードはどうから出した。」

ニヤルガの隣にはホワイトボード。手には指つきの棒。
「丁寧にめがねまでかけてる。しかも似合つてるし。

「企業秘密？」

「どこのだ。しかもこっちに聞くな。」

ニヤルガの前に立っているのは、先ほどまでの老人じゃなく変装を
といった状態のレイだつた。

黒髪に黒目、長身で、一言で言つなら「イケメン」。
ずっと無表情なのが玉に瑕だが。

と、いかお爺さんがいきなりお兄さんに変わったのに誰も気づいてないし。

「口達のおかげか。

「氣にしない氣にしない…ねー 一つねー。心地たつはありますか～
レイ君。」

美人教師が意外といったについてのニヤルガ。

「……俺的には完璧だと思つてたからなあ～。分からん。」

「一つね～。『体力』だよ 普通のお爺さんはあんなに体力無
いもん。」

ニヤルガが言つてゐるのほコウキと戦つたときのことだ。
けつこう長時間戦つたのに汗ひとつかかず、息も切らさなかつた。

「え。そつなのかー…じや、つかのじーさんヤベーな…。90
歳の癖に指たて伏せやつてるんだが・…。」

うん。類は友を呼ぶつてよく囁つよね
あ。この場合蛙の子は蛙かな

「やして二つねー…今時お爺さんは「ふお、ふお、ふお、ふお」なんて言
わない…」

「コレ重複だよー…」つてたら演技だからー。」

そんなことを真面目顔でこいつニヤルガはすうこんだかすうくないん
だか分からない。

「うわ～。やつぱりの爺さん参戻したからスッたのか…。」

「

レイのお爺さんは指たて伏せをして「ふお、ふお、ふお、ふお」なんてい

う人なんだね。どんなんだ。

「そして最後のひとつ。『セルリックはフライツ家の家宝だから。』でしょ？『グレイさん』。フランツ家では、次期当主にしか渡さないもんね～～」

さつきと同じ不敵な笑みを浮かべてレイ・・・・・・・グレイ?にウインクをする。

『セルリック』とは、レイが持っていた黒い刀のことだ。

「…そこまでバレてるとはな・・・・・。視力いいなお前。」

いや、10㍍くらい離れてて、剣に刻まれた文字読めたらもはや化け物だよ？

ユウキでもす”といのに。

「いや～。文字もちやんと読めたけど（え。）会話が聞こえたからさ～？次期当主ならちゃんとバリアはつとかないと、ダメだよん？」
もうキャラ崩れすぎ。

「…お前、『会話』が聞こえるのか？」

「うん。」

『会話』というのは使い魔とのテレパシーと同じような、剣とのテレパシーの会話のことである。

普通は、持ち主、《契約者》にしか聞こえないものです。

「「「うん」つて・・・・・。軽いノリだな・・・・・。」

なかば呆れ気味で言うグレイ。

「え。じゃあ、「そうだぜ！」？」

「いや、余計軽いからな？」

無表情でツッコミを入れるグレイさん。

良かった！

この人ちょっと天然で世間知らずなところあるけど（えー？）ニヤル
ガ達よりはまともだ！
しかも数少ない突っ込み役だ！

「あーそーいや試合中だつたね」

「あ。」

今頃気づいたのか、あんたら。

第7話 変装・・・？（後書き）

作：ども。銀風です。

グレイ（以下グ）：ふむ。新キャラに近い、レイことグレイだ。

作：には面白い展開になつたよね

グ：・・・・・ああ。俺のキャラが世間知らずで天然つて事に・・・！

作：ケツ。ざまー見やがれ　あ。でも、これからはグレイじゃなく

レイつて事で通すからね～。

レ：・・・・・これでフライツ家の次期当主つてばれたる爺いに殺さ
れるう！！

作：じゃあ、その前にもつとおじいさんのキャラを強くしないとね
レ：くつ！テメエ、前のあとがきの時とキャラが違うぞ！？

作：ふつ。残念だったな。この俺は多重人格者だ！！

レ：何が残念なのかわかんねえよ！？

作：でわ、次回の作者のキャラに（注田）
レ：したくなえ！？

説明会 今更だけど・・・？（前書き）

私にしてはめっちゃ早い更新です！

新記録です！

だけどそのがわり次が遅くなるかもです！

説明会 今更だけれど……？

作・じも。銀風です

今日は今さうですけど、登場人物や、世界観の紹介をしたいと思いま・・・

ミ…うよつとおーー何なによここはーー

コ…すっげえーさつあまで学園いたのに・・・。

作・ちよつと・・・。話の途中なのに遮らないでよ・・・。正むよ。

一…あ。作者じゅん。なんなのさ、急にこんなとこ呼び出しつかあ。

レ…うむ。いろんなの書いてる暇あつたら本編書け。

。 作・こやはあ！？・・・い、イキナリひどいや・・・レイ・・・・。

ミ…あーちよつと作者ーーイキナリ何よーー寝起きだつたのよーー？髪のセットの途中だつたんだからあーー

コ…・・・にしても作者・・・。その格好なんだよ？不審者か？

(作者の格好は「想像にお任せします」)

一…・・・・・はあ。このめっちゃ濃いキャラが全員集まつたら、いつもなるに決まってんじゅん。

レ・人のこと言えんだろ。

作・もうーーとあります、人物紹介から行くよーーちゃん見てろーー

ミ・ちよつと作者、話聞いてんの！？

作・では、行つきます

・・・・・

ニヤルガ・ミュウ・ラビネス

主人公。 13歳。

性格：めんどくさがり。

主な武器：オールマイティ。でもよく使うのは、剣で一刀流。

容姿：銀髪。オッドアイ。右が青で、左が緑。

この格好のときは、主に銀の服を着たりしている。

実は常に右手にドライ革の指だし手袋をつけている。理由はおそらく次の話で。

学園用の変装のとき。・漆黒の髪をボニー テールにしていて、身長は180。

この格好のときは主に黒い服を着ている。
目は深紅。

特技：何でも。できないことは無いといつても過言ではない（笑）

苦手なもの：なし。でもあえていうならば、熱血漢。

コンプレックス：普通の姿でいると、実年齢より低く見えること。

備考：実は右の青い田には隠された秘密があります。

・・・・・

一・何コレ。

作：ほら、この小説は主人公が最強だからさあ。

三・ねえ、変装つて何・・・

作・さて、次行きましょう

・・・・・

ミカ・フォスター

ヒロイン（？）18歳。

性格：負けず嫌い。短気。

主な武器：なし。この先杖が出てくるかも？

容姿：赤髪。ストレートで、長さは肩よりちょっと長いくらい。
身長は170cm。服はいつもボーイッシュでおしゃれなものを着

ている。

特技：魔法をすべて黒魔法並の威力にできる（笑）

苦手なもの：猫。

コンプレックス：なし！

備考：実は好きな人が・・・キヤハツ

・・・・・

ミ・ヒロイン（？）って何よッ！？正真正銘のヒロインよッ！？

ユ・つてか特技じゃないだろ、アレ。

ニ・「キヤハツ」つて・・・キモ。

レ・同意。

作・なッ！？ひどいな！？

ユ・ううん・・・。作者の性別が余計に分からなくなつたな？前、自分のこと「俺」つて言つてただろ？

レ・確かに。その・・・変な格好じや、顔見えないしな・・・。

（改めて作者の格好を見るレイ。）

作・ふむ？プロフィールには書いていないが、俺は一応女だぞ？

「…ええええ…？マジかよッ！？」

ミ…女の子だったの！？

「…「俺」は、やめたまつがいいと黙つたび…？」

作・む？学校でも俺つづってるだ？

コ…うつわ。絶対兄弟に男いるだ？

作・いるぜ 僕に似てイケメンな兄貴がな

レ…自分で言つなよ？

作・さて。話がむりやへりやそれたな 次行つてみよー。

・・・・・

ユウキ・フィスティル

ヘタレ。一応突っ込み。18歳。

性格：弱虫。

主な武器：グレゴール。友達もあります。

容姿：黒髪。肩にかかるかからないか、微妙なところ。
身長は170cmくらい。服はいつもミリタリーナに選んでもらつたもの

特技：細かい作業。手先だけは器用です

苦手なもの：幽霊

ハンパレックス：身長がミリタリーナと1cm。

備考：いじられキャラだから、体だけは丈夫（笑）
東洋人だけど、名前は思いつき西ヨ。それは～ お父さんが西洋
人だから

・・・・・

ユ：かなり悪意が感じられるんですねけど…？

一…くえ～。服は//リに選んでもらってるんだあ～（ニヤニヤ）

レ…手先「だけ」は器用とか言われてるな。（クククッ）

ミ…あ、あんたいまだに幽霊苦手だつたんだ…？…。（アッ）

ユ…な、なんで皆笑つてんだよ…？ひ、ひどい…？…。

全（ユウキ以外）：いじられキャラでヘタレだから。

ユ…うわあ～～～ん！！！！

（泣き叫びながら退場。ケケツ　）

作…さて。次はレイの番～

レ…む。やつとか？

・・・・・

レイ・バスター（グレイ・フランシス）

突つ込み。18歳。

性格：天然。世間知らず。冷静だけど時たま取り乱します
主な武器：セルリック。魔法もかなり使えます。

容姿：黒髪。長さは肩より10cmほど長くて、1つに結んでる。
身長は180cmくらい。服は適当。最近まではいつもボロボロの
服を着ていたが、変装をといたため、女の子のファンが急増。服を
プレゼントしてもらつたりしているので、派手じゃない限りは着て
いる。カッコイイ

特技：ジャンプ力。垂直で跳んでも、2mくらい飛び上がれます。
もう化け物です

苦手なもの：お酒。（ここには未成年という言葉は存在しないのだ
）

コンプレックス：強さ。今でも十分強いんだけど、さらに上を目指
したいんだってさ。カッコイイ

備考：フランス家の次期当主だが、わけあってレイール学園に
いる。

・・・・・

レ…「カッコイイ」のところにかなり悪意が感じられるんだが…
・・・

作・うん 今の俺はうな性格だからなッ

二・自慢げに言つな。キショイ。

ミ・その・・・・・格好でいうと、余計にな・・・。

(改めて作者の格好を見る//)。

作・むう。俺の本当の顔見たらそんなこといえんぞ?自分で言つのもなんだが、俺は可愛いからなッ

レ・・・・・でも、性格がな・・・。

二・うん。多重人格のトコはかなり痛いと思つよ。

ミ・ひょっと変人なトコもね。

作・うわお。きつびしい。

レ・しかし、4人の説明だけでこんな量になるとは・・・。

二・おそるべし、作者。

作・あはっ 次は、この世界の紹介するよ。

・・・・・

「銀の魔法使い。」の世界観の説明。

ニヤルガ達のいる世界は、通称「ヒールウェル」。
地球のように丸い形じゃなく、飛び箱みたいな形します。

普通に魔法があつて、精霊や、魔物が普通に存在するところ。

・・・・・

ニ…ずいぶん大雑把だね？

作：何か説明してほしいことがある奴は、コメントをよこせ そしたら付け足してやる。

レ：…ずいぶん上から目線だな。

作：うむ。なにせ、最近やつと読者が1000人を越えた。

ミ…良かつたじゃない。

ニ…ってか、それとこれとに、何の関係が？

作：1000人も読んでるくせに、俺のリア友しかコメントをくれん！悲しいぞ、俺は！！

(じら~とした目で作者を見つめるニヤルガ達。)

作…と、いうわけで、なんでもいいんでコメントをおくれ。

……こんな作者は放つておいて、次は魔物の説明です。

作…ひどいなッ！？

・・・・・

『魔物』

魔界にいる生き物全般。

ほとんどがグロイ姿をしています。時には人型も。

普段は魔界から出てこないけど、時たま現れる『時空の歪』からヒールウェルに侵入してくることがある。

侵入してくる理由は、主に人を喰うため。なんか、オレンジと蜂蜜と、林檎と桃とパイナップルが全部呑み下した味がするらしいです、入って。

・・・・・

レ…なんだ、最後の説明。

二・何つて、人のおいしさの説明だけど・・・。

ミ・いらなツ！？つてか誰に聞いたのさツ！？

二・魔王。

(ミ&レ) :すごいなツ！？

作・魔王かあ。かれこれ8人くらいに会ったな。

(ミ&レ) :あんたもか！？

作・じや、続いてニャルガ、妖精の説明ビデオ。

二・はい。

・・・・・

『妖精』

妖精界にいる生き物全般。

かわいい人型から、気持ち悪い河童みたいなまでいます。
あ、ちなみにミロは人型だよ。河童とかキモイし。

人型の妖精は基本的に魔力が強い。
ミロも強いよん。

羽生えてる奴とかいるけど、残念ながらミロは生えてないんだ。
でも本人は「コレでも妖精界一の美少女で、一番強いんですよッ！
？それに妖精王ですし！・・・あ。言っちゃった。」って言つてた
けどね。

・・・・・

ミ・・妖精王ツ！？ミロつて妖精王なわけえ！？

レ・初耳。

ニ・・妖精王つて何？

(ミ&レ)：知らないのかよツ！？

ニ・うん

作・でわ、妖精王の説明、どぞ

・・・・・

『妖精王』

妖精界の王様。

といふか、妖精界で一番強いやつで全部で7人。いや、匹?

何故7人なのかは、簡単

属性が7つあるから。

ちなみに火、水、地、風、闇、光、無の7種類だよん

この王様達は、めちゃ強なので普通は国単位で契約しています。
つまり、//ロはすごい異例なのです。

・ · · ·

//ロ・何かこの言い方ものすごいムカつくんですけどッ!?

ニ・あ。//ロ。意外とすこかつたんだねッ

レ・意外とどこかじゃないがな。

//ロ・そですよー···。う。でもですね···。

//・でも向々?

ミロ・ゴ主人に仕えてるもう一人の方が地位的には私よりすごいんですよう・・・。

ミ・そんなすごいの！？つてか妖精王よりすごいって・・・・・何者よ？

作・それは次回で 安心しろ、~~自分~~分出でくるから

?/?・オイ！多分つて何だよッ！？

レ・あ。 増えてるし。

ミ・い、 いつの間に・・・。

?/?・たぶんじゃなくて、絶対だらうがこの野郎！！

作・俺は気分屋だ！！

?/?・血腥げにいうなあ！！

作・ケツ。使い魔の分際で・・・。

レ・何だ、ニヤルガの使い魔か？

ミ・見たところ、その様ね・・・。

〃口・ああああ！－なにニヤルガに馴れ馴れしくしてるんですかあ
！？

？？？・あん？妖精王が何のよつだあ？

ニ・あ。〃口～ 今や、遊んで・・・

（〃口＆？？？）・ねえよ！！ 無いです！－！

ニ・うわあ・・・。見事なハモリ・・・。

〃口・大体、お前はニヤルガにテレテレし過ぎなんですよ！－！

？？？・あん！？テメエが羨ましいだけだろうが－！

ニ・・・・？何で争つてんの？

レ・鈍感、だな・・・。

ミ・鈍感、ね・・・。

作・このニヤルガの使い魔は、次回登場します！－！つまりコレは前置きです！

レ・長かったな・・・。

ミ・長かったわね・・・。

作：でわ、また次回

(//&????) : 終わりかよ（ですか）！？

説明会 今更だけど・・・？（後書き）

レ：何か最後まで後書き的なノリだったな。

作：そうだぜ

レ：・・・・ウゼエ。

作：ひどいな！？

レ：俺はこれから予定があるからな。さっさと切り上げるぞ。
作：むふふ。予定って・・・お爺ちやんに殺されないようにするための特訓でしょー？

レ：うお！？何で知つてんだよ！？

作：図星、だつたみたいだね

レ：・・・・チイ。

作：行儀悪いぞ。

レ：今日の後書きはここまで また次回（棒読み）

・・・・つてことで、さらばだ。
作：つてあー逃げんなあ！

第8話 王様が2人・・・？（前書き）

キャハ

今日はうるう年にしかない日ですね

そして今日誕生日な人！

うらやましいです！

超若いじゃん！

「私はまだ3歳よ」

といか言ってみたくありません？

第8話 王様が2人・・・?

「よし！レイ、賭けしようよ。」

「・・・・何だ、急に。」

試合をすることをすっかり忘れていた2人が向き合って立っています。

「いや、ただ勝負すんのつまんないからや」

親指を立ててポーズを取るニヤルガ。急にどうした。

「賭けか。面白そうだな。いいぞ。」

いいんですか。

「じゃあ、私は、私が勝つ方に賭けるから、レイは、レイが勝つ方に賭けてね。」

「ふむ。何を賭けるのだ？」

腕を組んでレイ。

やつぱりやるのか。

「じゃ、私が負けたら本当の姿見せてあげるよん。」

いいのか？

「ほう。興味深いな。」

「じゃ、レイはさ、負けたら今年1年私と遊ぶって事で！」

それは・・・・

「キツイな、それ。」

・・・・・

『あああ……もっとうべの昔に始まつたあ……』

観客達のころの方で、頭を抱えていた。意外と器用だ。

「…………といふか、あれ誰だよ?」

「…………いつの間にいたのかしら。まったく気づかなかつたわ。」

青年姿のレイを見て不思議がるコウキと。』

あんたらが騒ぎ起してたときだよ。

『…………でも、戦つてはいないみたいですよ。良かつたあ……。

ホッと胸を撫で下りや。ロ。やっぱり器用だ。

「何か、ニヤルガが親指立てたりしてるのが見えるんだけど、試合では普通こんなことしないよな……?」

「……コウキ、あれは幻覚よ……ニヤルガが真面目にやつていることを信じましょ!……」

・・・・真面目に、せつなによな?アレ。

『あ。何か戦うみたいですよ。……って、フニヤア!?』

「うわ!……どうした狐!?」

「な、何猫みたいな声上げてんのよおー?」

同時にロのせつく振り返るコウキと。』

『ひ、久しぶりの召還です……。ってか、こんなに近くにいるの

にこちこちしなぐとも・・・。あ！一人とも、ひょっと試合に出で

きます！』

敬礼をするニヤルガ。・・・もはや、狐の粹じき超えてるな？

「RIO遅つて・・・あ！」

「へ、うひやあ！？き、狐が消えた――ツ！？」

ミロは、宙に現われた手に捕まれて、消えてしまいました

・・・・・

「//ー口ーーー。聞こえますかあ―――。」

「・・・・。」

「//ー口ーーー？居ないのぉ――――？」

「・・・・。」

「うん。居ないな」

「・・・・・わっきから聞きたいのだが、何やつているんだ？」

レイの田の前には、黄色と黒のストライプ いや、もうまつ

りまづおづ。

阪 タイガーズのメガホン持ったニヤルガが、観客のほうに向かつて叫んで（？）いるのだ。

「何つて、武器を探してるんだよ。レイはね、魔法剣で戦うんでしょ? だつたらこいつも剣で戦わなきやあ」

「・・・そつちじやなく何故阪・・・・いや、やつぱりーー。」

何かを諦めたかのように明後日の方向を見るレイ。

諦めないでくれ! 唯一の望みが!

阪のメガホンをウエストポーチにしまいながらニヤルガは不敵に笑つた。・・・・い、怖エ・・・。

「面白いもの見せてあげるよー。」

ニヤルガはそういうと、右手につけていた指だし手袋をはずした。

「異次元に通じるペントакルか・・・。便利そうだな、それ。」

ニヤルガの右手には青色で、が刻んであった。

ペントアクルは、時空と時空をつなぐ為のものである。

ニヤルガのようには異次元に通じているものならば、物がいくらでも取り出せるわけだ。便利。

「あはは。私の場合、もっと面白い使い方ができるんだよん。」

ニヤルガの言ひ面白いは・・・・怖いな。

ニヤルガは不敵に笑うと、右手のペンタクルに魔力を流し込んだ。
青色だつた星形の刺青が、銀色に輝いた。

入り口が、開いた証拠だ。

「面白い使い方、か・・・・。正直見たくないな・・・・。
同感だぜ、レイ！」

「コレを、こうすんの！－
ズブブツ！－

右手に左手を、『突っ込んだ』

「ん～。どつこかなあ～～
ズブ、ズブブブツ・・・。

「・・・・・グロッ。
」

確かに、自分の左手を右手にひじくらいまで突っ込んでるのは・・・
・・グロイ。グロテスクだ・・・。

「よし！ 2つ見つけたあ～～
グチャ！」

ニヤルガは思いっきり左手を引きぬいた。

「・・・・づ。何だその生き物は・・・。
」

ニヤルガが引き抜いた左手につかまれていたのは、

白い狐と、黒い狼。

しかもどつともペントアクルをぐぐれるくらいのサイズになつていてる。

「何つて？・・・・使い魔」

『オイ！テメエ何つかんでんだよー？ヤけんな！』

『ニヤルガ・・・・こんな近くに居るんですけど、呼んでくれたらい
いのに・・・・。』

今回はサービスで、会話がレイにも聞こえるようになつてます

「使い魔・・・か。やるな、ニヤルガ。」

「エヘ ちなみに白いほうが妖精王で、黒いほうが魔王だよ」

何気にヤバイ事言いました―――ツ――?

「ま、魔王つて・・・・。それって使い魔にしていいもんなのか?
「さあ？いいんじゃね？」

『駄目に決まつてんだろーーがッ！』

『ニヤルガが無理矢理使い魔にしたんですね・・・・魔王ボコボ
コにして。』

・・・・・』、怖エ・・・・。

『「う・・・・。思い出すだけで・・・・。」ンはトライアになるよな・
・・・・。』

『分かりますよ、魔王・・・・。私も同じような感じでした・・・・。
暗い顔をする狐と狼。・・・・器用？

「お前・・・昔ツからこんな感じなんだな。」

呆れた表情をするレイ。

「なーに言つてんのレイ。私は生まれたときからこんなんだよ 」
ひ、開き直つた―――ツ！？

『 オイ、妖精王。』

『 何ですか？魔王。 というか妖精王つて呼ばないでください。ミロ
です。』

『 あん？ だつたらそつちも魔王つて呼ぶなよ。ソーマだ。』
新発見 魔王はソーマつて言つらしいです。意外とカッコイイ名前
だ

「 ミロ～、ソーマ～。これから戦うんだよ～？」

頬を膨らましてニヤルガが言った。・・・・・魔王をボコボコにし
た奴には見えん。

『 おお！？マジか！？久しづりだな！オイ！』

『 私達が出てくるなんて・・・。結構本氣ですね？』
テンション上がる魔王と妖精王。・・・・・うわあ、こう書くと凄い
ことになつてるみたいな感じ～

「 ツてことで、変身よろしく～」

親指を立てるニヤルガ。・・・・流行つてんの？

『 変身つて・・・。何にだよ？』

「 そだな・・・。じゃ、ククリ刀一本で。」

ククリ刀・・・・。

知つてる人は知つている、超マイナーな武器だ！（ククリ刀好きな

人はすいません・・・。)

『はいよ。』『分かりました。』

ポン

可愛い音がして、二人の王様はククリ刀になりました。
白と黒のワンセット。

意外と氣があつたりとかするのかな?

『しねえよーー!』『しませんーー!』

OH!ナイスハモーリーー!(カタコト)

「よし 私はさ、いつもなら特に武器使わないんだけど、使えない
わけじゃないんだよね~。」

一本のククリ刀を逆手に持つニヤルガ。独特の構え方だ。

「ふむ。ではやろうか?」
腰に差してあつたセルリックを引き抜く。

ユウキのグレゴールとは違い、日本刀風なセルリック。
だから持ち運び簡単

「よし。勝つて一年遊んでもーらおつと
じ・・・・・

地獄だーーーーツ!!

負けるなレイ!!

負けたら地獄が待ってるぞツ!?

「・・・・では、参る・・・・」

「はいよ」

『行きます』

『おうみーー』

またもや続く

第8話 王様が2人……？（後書き）

作：ビーも。銀風です

二：にやほー。ニヤルガだよ。

作：……最近パソコンのやりすぎで肩疲れたーー。

二：……つい最近は「ゲームのやりすぎで指痛いーー」って言つてたじやん。

作：え”……そ、そうだったつけ

二：それにーー、最近更新早いのだってえ、あのゲーム全クリしたからでしょー？

作：……長かった……。何しろラスボスが三回も生き返つて・・・つて、何言わせんじやボケエ！－

二：わーいノリツツ ロミ

作：……チイ。今の私がツツ ロミの人格だったから良かつたものを……。

二：あ。本当だあー。「俺」から「私」になつてるうー。

作：結局男みたいなのは変わりないがな。

二：……にしても作者あ。

作：なんだ。

二：なんで多重人格になつたのあ？

作：……はあ。イキナリだな……。それは幼いころからたくさん小説を書いていて、主人公の人格が様々だったから色んなのに影響されたんだよ。小説読んでたのもあるけど。

二：幼いつて……今も幼いじやん？

作：……黙れ。

二：私より年下……

すどこーん。

（何かが爆発する音 ）

作：……ふう。邪魔者は消えた……。

さて 今日はいいお終いだヨ 次回をお楽しみこゝへ （棒読み）

第9話 最強技・・・？（前書き）

すこませんでしたアアアアア――――――

なんかもつ絶賛鬱中 で――――

いぐり書いても変になつてえ――――・・・・・

・・・・はい。

作者の戯言（言訳ともいひ）は聞き流して小説に行っちゃつて
下さこ。

長い間更新してなかつたくせにレベルの低い小説だけれども、ひつ
か読んでくださいませ！

第9話 最強技・・・?

「え、ええええ！？な、なんで狐がいきなりあつちに出てきて、イキナリ刀に変わったのぉ！？」

「ちりはミラ、コウキサイド。

ミロがククリ刀に変わったことに驚いてます。

「う、え、ええ・・・っど？ど、とりあえず、ニヤルガが本気になつたつてことだよ・・・な？」

「私に聞かないでよ・・・。」

「・・・が、がんばれニヤルガー。」

「・・・がんばりなさい。」

何がどうなつてんだか良く分かつてない2人でした

・・・・・

「こや

「・・・チイ。」

カキーーン！

刀同士がぶつかり合い、火花を散らす。

それと同時に反対へ跳ぶレイとニヤルガ。

「う・・・。化け物か？お前・・・。」

痺れた腕を振つてレイが言つた。

・・・・垂直飛びで2メートル飛べる人に言われるとほ、相当だね？

「さ～？」

肩をすくめるニヤルガ。

「でも、レイもなかなか強いと思つよッ！」

レイを指差してニヤルガは言つた。

・・・魔王と妖精王より強い人に言われるとは、こいつも相当・・・

「・・・・。それは褒めているのか・・・？」

複雑そうな顔をするレイ。まあ、化け物つて言わたしね～。

「言つたのレイじゃん。」

ニヤルガ天の声聞こえるんだ・・・。

「よし、じゃあ本氣で行くからさ、そっちも本氣でよろしく

「今ので本気じゃないのか・・・？」

驚いた、というより呆れた、という表情をするレイ。

「え？ だつてそっちだつて本気じやないでしょ？」

『え・・・？ ですか？ 思いつきり来てましたけど。』

「何言つてんのミロロー。だつてレイが持つてるのは魔剣だよ？魔法使えるに決まつてんじゃーん。」

『ああ～。そーいやそうだな？普通に戦つてたしな・・・。』

納得する魔王と妖精王。――（以下略）

「ふむ・・・。大丈夫なのか？今の俺ではうまく使いこなせない力だからな・・・。

「こいら一帯がなくなるかもしれんぞ？」

「何気にやばい事言つた――――ツ！――？」

無くなるって！？消滅ツ！？こいら一帯つて規模でテスカツ！？

「大丈夫大丈夫　こいらには一応結界張つてあるし、学園長もいるからオッケー オッケー」

『軽いです・・・。』

『・・・ああ。俺らも本気出したら・・・ヤバくね？』

「・・・まあ、大丈夫だよ。じゃ、一ヤルガ行つきました
いやいや、それいろいろとヤバイでしょ！？

「もう・・・。仕方あるまい。行くぞ。」

何が仕方ないのさー？できるならやめてください！？

ニヤルガとレイは、同時に剣に魔力を込め始めた。

・・・・・

「おやおや。体育館が大変なことになつてているようだね？」

「こゝは学園長室。

そんなどこかで優雅に紅茶を飲んでいる人物がいた。

つたくなじ優雅にしてやがんだ！あつちでは人類滅亡の危機が・・・
・！・！

「まあまあ落ち着いて銀さん。」

銀さ・・・！？いや、それもヤバイでしょ！？つてか何故に聞こえるんだ！？

「人生の卓越者たくえつしゃには聞こえるんですよ、天の声が。」

絡みにくいつて！？・・・でも、初めて作者以外で呼ばれたよ名前！。

「ふふふ。ではいきますかねえ。」

何所に？学園長サン。

「もちろん、人類滅亡の危機を止めにですよ。」

うつわ、何それ。遠まわしな嫌味？

「いえ、違いますよ。作者。」

そういうて学園長は一ツコリ笑った。

酷い！？

・・・・・

「ひゅー カッコイイね、レイ」

「そういうお前も怖いぞ。」

カッコイイと怖いは同義語じゃないよ？

レイは、全身に黒いオーラをまとっている。

対するニヤルガは、白と黒のオーラが混ざった感じだ。

・・・・・じつも怖えよ（汗）

「//口せや、光の妖魔王なんだ。だから白と黒なんだよ。」
説明するニヤルガ。意外と余裕？

『そですよ。なんか魔王とワンセシトで言われるのつてものす』
嫌ですね』

『はあ！？俺だつて嫌だツつーに！』

『何ですか？やるんですか？ヘタレ魔王？』

『なんだと！？・・・やつてやるよ、電球！』

『で・・・！？何処がですか！？』

『光つてるト』。

『ぶ、ぶつ殺ーーす！』

「なんか仲悪いな・・・あの一人。」

『喧嘩するほど仲が良いって言つじやない』

・・・。

「あ。そーいやセルリックつて女人の人なんだねー。珍しいよねー。」
喧嘩している二人を無視（？）してのんびりと話すニヤルガ。

『わお！ホントに聞こえるのねニヤルガちゃん！感激だわ。こいつ
無口だからねえ、話し相手が居なかつたのよお。キヤハツ』

「・・・・まつたく・・・・・。ホントに家宝かと疑うな。」

『残念でしたツ！ホントに家宝だもんねえ。ちゃんとアンタの先
祖だつて握つたわよ。』

「・・・・できればいますぐ過去に行つて取り消したいな。」

・・・。

「なんかまたのんびりになつちやつたけビビーこくよレイン。
「・・・・俺もいくぞ。」

「ソーマ、ミロー、三段詠唱やるからねえ」

『・・・わかつた。』

『了解ですニヤルガ！』

ニヤルガは大きく深呼吸すると詠唱し始めた。

「・・・・古に宿る緋龍よ、我に力を貸したまえ・・・」

『暗黒に住まい黒龍よ、今ここに現われよ・・・』

『氣高き聖龍よ、今力を解き放て・・・』

「我流三段詠唱魔法！」

『『『カオスドリゴン！』』』

ニヤルガの持つクリ刀から、三匹の
ドラゴンがレイに向かって飛び出した。
紅、黒、白の

「はあ・・・。できれば使いたくなかったが。」

『ほらほら そんなこと言つてる場合ぢやないわよん』

「加減できんが・・・・」

『ソコは気合でカバーよッ』

はあ・・・と、レイは再び深い溜息をつき、ちょっと真面目にセルリックを捨ててしまおうか・・・とを考えた。

『アンタ今失礼なこと考えたでしょ・・・・?』

「氣のせいだ。」

レイは、セルリックを構えた。
すっと目を細める。

「フランツ家流、奥義・・・・」

『「魔神龍破斬!」』

モード、アリゲンヒト龍がぶつか合つた

作・どうも。またもや銀風です。

ニヤ・ヤツホー 二ヶ月ぶり!

作・はい・・・・。すいません。マジですいません。

次からはがんばりますです、はい。

ニヤ・うん！大丈夫だよ！次遅かつたら斬るから

作：（ビクウツ！）そ、そうですねー。

ニヤ：それに前回のお返しもー

フフ。
(^{*}第8話後書き参照)

作：（ソケソケソクウツ！） もと、今田は「これまで！？」をやうなら

誰もん！をもうなら自分！今度会

ニヤ・まつちやがれえい／＼

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3102d/>

銀の魔法使い。

2010年10月11日01時44分発行